

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K17210

研究課題名(和文)アウトブレイクにおける知識の信頼性の経時分析とコミュニティ・レジリエンス評価

研究課題名(英文)Metachronic analysis of reliability of knowledge and evaluation of community resilience in outbreaks

研究代表者

中川 千草(Nakagawa, Chigusa)

龍谷大学・農学部・講師

研究者番号：00632275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、西アフリカにおいて2013年12月からはじまったエボラ出血熱の流行を事例とし、病をめぐる知識が、どのように人びとの間で広がり共有されるのか、あるいはされないのかについて分析した。これにより、医療サービスの提供や人道的支援を行う際には科学的な知識が必要不可欠であると同時に、それらを主張する(しすぎる)ことによって、地域社会のなかで育てられてきた、病や死をめぐるローカルな知識がないがしろにされたり、それらが流行の原因とされることを指摘した。さらに、社会的危機への応答においても、ローカルな文脈を注視することこそが、コミュニティのレジリエンス(復興力)を促すことをあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、当該感染症の流行期間中と終息宣言後の二つに大きく分けて整理することができる。
流行中：支援団体やアフリカ研究者、さらに一般社会に対しては、現地の様子に加え、現地のみならず、それ以外の(国際)社会が抱える課題を示すという意味で、「速報」としての役割を果たした。特に、ローカルな知識に基づく対応を対策の妨げとする見解が一般化していたことに意を唱え、ローカルな知識体系の生成と流通をあきらかにしたことは、学術的にも社会的にも意義がある。
終息後：今後の感染症対策に活用可能な視点を示しつつ、医療、文化、経済活動など多面的なアプローチと、流行の有無にかかわらず継続的な研究の必要性を示した。

研究成果の概要(英文)：The point of this study is the "circulation" of knowledge about the disease in the case of the Ebola outbreak which started in December 2013 in West Africa. By analyzing this, when providing medical services and humanitarian assistance, the emphasis on scientific knowledge tends to conclude the local knowledge of illness and death causes epidemics. Moreover, in response to the social crisis, it became clear that focusing on the local context promotes resilience of the community.

研究分野：社会学

キーワード：エボラ出血熱 感染症 パンデミック 知識の流通 コミュニティ・レジリエンス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の始まりは、2008年からフィールドワークを実施し研究の対象としてきた社会(ギニア共和国)が、2013年12月からエボラ出血熱の流行という社会的危機にさらされ、世界的な問題として認識されるようになったことと、感染症対策における科学的な「正しさ」が、現地で反感を買い、社会的な混乱・感染拡大の一端を担うという意図せざる結果を招いていることを受けたことにある。

特に、現地における病のとりえ方や葬儀の習慣、意思決定システムに関するローカリティが、対策における科学的アプローチの妨げと位置付けられることへの反証として、現地の人々が多様なネットワークを基盤としたセーフティネットを活用しながら、流行中の生活を組み立てている様をとらえることが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、西アフリカ(特にギニア共和国)における、2013年12月からはじまったエボラ出血熱のアウトブレイクを事例に、感染症対策に必要とされる科学的な知識と、ローカルな文脈で生成された病や死を巡る知識が、人びとの間でどのように受容、拒否されるのかということ进行分析し、コミュニティ・レジリエンス(resilience)の構築を「知識の信頼性」という観点からあきらかにすることである。具体的には以下三点に着目し、研究を遂行した。

各国政府や援助団体が科学的な根拠にもとづき、感染症に関する知識を流通させようとするプロセスと、その際の課題。

現地の人びとによる、未経験の社会的危機に対する理解や、科学的知識へのレスポンス内容(拒否・受容など)、さらにその背景となる知識のしくみ。

信頼を伴った知識体系とコミュニティ・レジリエンスの設計。

3. 研究の方法

資料研究とフィールドワークを組み合わせ、研究を実施した。具体的には、次の通りである。

- ◆ 国際支援団体 MSF や現地保健省関係者、医療従事者へのインタビューと文献・資料研究を通じた、科学的な知識の導入・流通プロセスの把握。
- ◆ 首都コナクリおよび Boke 県 Kamsar 副県の住民に対するインタビューを通じた、病や死をめぐる現地の知識、習慣、さらに意思決定やネットワーク形成に関するローカルな知識のしくみの分析。
- ◆ 流行中の渡航不可能な状態での対応：SNS や電話の利用、さらに現地協力者を介した間接的な聞き取り調査や情報収集、日本やパリなどに在住する現地出身者に対するインタビュー。

4. 研究成果

(1) 国際社会や各国政府が科学的な根拠にもとづき、エボラ出血熱に関する知識を流通させようとするプロセスと、その際の課題についての情報を収集した。ギニア保健省

や WHO、支援団体などが発行する資料では一貫して、病や死に関するローカルな知識を流行の原因、対策・啓蒙活動の妨げとなることが強調されていたが、こうした態度＝科学的根拠の主張が強まれば強まるほど、現地の人びとからは反発が起きていることがあきらかとなった。

(2) 科学的知識へのレスポンスと、その背景となるローカルな知識のしくみを分析すると、こうした支援活動では、流行前＝プレ・パンデミックの視点が大きく欠けており、それこそが支援する側とされる側との相互理解を一層遅らせる要因となっていることがわかった。本研究が対象としたギニアにおける平時の情報や、文化的な面も含めた研究成果はほぼないに等しく、都市部でのエボラ出血熱の流行も前代未聞だった。支援団体の多くは、他のアフリカ社会での経験を元に、活動や事業内容を計画、実行していたが、ギニア固有の事情を鑑みることができておらず、対応の誤りや遅延を避けることができなかつたと言える。ただし、流行が長期化するに伴って、科学的な知識の必要性が次第に理解されるようになって行った。手洗い・消毒の習慣が根付き出したことや、科学的な知識や流行そのものに関する話題が人びとの間で積極的に語られるようになったことがその例である。

(3) 当初期待されていた、ギニア以外に暮らす、ギニア出身者たちからの情報発信や啓蒙活動は、あまり機能していなかった。出身者たちは、現地在住者よりも「正しい」知識と情報にアクセスしやすいと予想されるが、むしろそうしたメディアを通じた情報よりも、親族や友人からの現状報告を信頼する傾向にあり、その信頼こそが、人びとのレジリエンスの一端を担う可能性を持つ。現地の人々が語る、流行による生活上の制限や不安、憂いなどを傾聴し、気持ちに寄り添うことは精神的な支えとなると同時に、出身者たちもこうしたコミュニケーションを通し、自らの生活の厳しさ(慢性的な貧困状況や差別問題など)の「癒し」を得ている。一方で、連絡を取り合うことで経済的な支援を懇願される可能性もあり、それに対応しきれないと判断するならば、積極的なコミュニケーションを控えることが選択されることもあきらかとなった。

以上3点から、「コミュニティ・レジリエンス」は、プレ・パンデミックの感覚を尊重し、人びとのコミュニケーションのリアリティを把握した上で設計される必要があることと、非常時には支援を提供したり情報を発信する側と、それらを受け取る側とのあいだの相互理解にある程度の時間をかけること(一定のリスクを引き受けつつ)が必要不可欠であるという研究成果が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中川千草	4. 巻 53
2. 論文標題 ギニアにおけるエボラ出血熱の流行をめぐる「知」の流通と滞留	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 アフリカレポート	6. 最初と最後の頁 73-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中川千草
2. 発表標題 在外ギニア人たちと Ebola 出身地の社会問題との向き合い方
3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川千草
2. 発表標題 納得と拒否という住民の反応にみる、感染症対策における課題 - ギニアにおけるエボラ出血熱に関する知の構造 -
3. 学会等名 日本アフリカ学会第52回学術大会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松本尚之、佐川徹、石田慎一郎、大石高典、橋本栄莉、中川千草	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 アフリカで学ぶ文化人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

中川千草, 2015, 「日常に埋め込まれたエボラ出血熱 流行地ギニアに生きる人びとのリアリティ」『SYNODOSシリーズ「等身大のアフリカ/最前線のアフリカ」』<https://synodos.jp/international/15509>

中川千草, 2018, 「日用品で呪いを吹っ飛ばす」『月刊みんぱく』42巻7号 8-9

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----